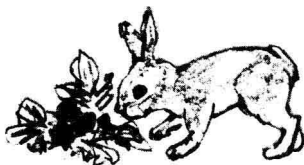


# まてんばともしと ライオン先生

大谷正紀／作  
吉崎正巳／絵





912

大谷正紀

おてんばとも子とライオン先生

158p 22cm <国土社の新創作童話—①>

国土社の新創作童話—①

おてんばとも子とライオン先生

初版発行

1983年2月5日

2刷発行

1983年5月30日

著者

大谷正紀

発行者

長宗泰造

印刷所

株式会社 厚德社

発行所

株式会社 国土社

☎112

東京都文京区目白台1-17-6

電話

東京 (03)943-3721(代)

振替

東京 6-90631

大谷正紀 吉崎正巳 1983

乱丁・落丁本はおとりかえます。

ISBN4-337-01831-X

# ばとも子と ライオン先生

大谷正紀／作  
吉崎正巳／絵



国 土 社

# もくじ

|           |          |         |         |        |            |       |        |       |      |
|-----------|----------|---------|---------|--------|------------|-------|--------|-------|------|
| 10        | 9        | 8       | 7       | 6      | 5          | 4     | 3      | 2     | 1    |
| 赤ちゃんがうごいた | ミスバシヨウの花 | カマイタチの目 | みじかい夏休み | 滝つぼの火柱 | とも子のせいじやない | くりこま山 | ライオン先生 | 雪のなかで | 山の分校 |
| 108       | 95       | 82      | 71      | 61     | 50         | 38    | 27     | 14    | 4    |



|      |          |     |
|------|----------|-----|
| 11   | ふぶきの夜    | 119 |
| 12   | お母さんのなみだ |     |
| 13   | また春が     | 140 |
| 14   | 先生、さようなら | 152 |
| あとがき |          | 158 |
|      |          | 130 |



# 1 山の分校

もうすぐ三年生になるというのに、とも子はちっともうれしくありません。きゆうに山の分校に転校することになったからです。

（三年生になったら、受けもちの先生はだれなんだろう。二年生のときのやまむら先生だったらいいな。毎日とりかえてくる洋服がすてきなもの。クラスの友だちも、また、みゆきちゃんや幹也くんといっしょだったらいいな。）

むねをはずませていたのに、もうおしまいです。

「どうして、山の分校になんかいつちやうの？」

みゆきちゃんにもきかれました。

でも、とも子が知っているのは、お父さんがとつぜん会社をやめて、くりこま山のおじいちゃんの家へかえるということだけです。

「ともちゃんのパパ、このあいだ、係長さんになったばかりでしょ。もったいないわ

ね。うちのママが言ってたわよ。」

ほんとにもつたいない話です。せっかく係長さんかかりちやうになれて、お母さんだってようきげんだったのです。それをいきなり、「山へかえることにしたよ」だなんて、ひとりであつてにきめてしまふんですから。

「山のなかの分校ぶんこうなんですよ。そんなら、クマだっているわね。なんかすてきじゃない。勉強ちゆうに、まどからクマさんがのぞいたりして。」

ちつともすてきではありません。クマなんか遊びあそびあいてになりません。

「お花畑はなばたけだつてあるんですよ。雪だつていっぱいもるわね。いっぺんでいいから、わたし、そんなところに住すんでみたいな。」

みゆきちゃんは目をくりくりさせて話しましたが、とも子はどうしてもそんな気持ちになれません。

「ともちゃん、お手紙ちようだいね。わたしも書くから。」

「うん。きつとね。」

みゆきちゃんと、マンションの入り口でわかれました。

どんよりくもった空で、風がヒューンとうなっています。とも子は、いそぎ足で、マンションのかいだんをかけのぼりました。

山の分校がっこうにいったら、どんな先生が受けもちになるかわかりません。クラスの友だちもクマのようにらんぼうな人ばかりだったら、たいへんです。

そんなことを考えると、ぞっとしてきます。

このあいだの晩ばん、お父さんがおそくかえってきたとき、お母さんといいあいをするのを、とも子はとなりのへやできいてしまいました。

「山にかえることにしたよ。会社かいしゃは、三月いっぱいまでやめる。」

「えっ！　なんていったんです？」

お父さんは、おなじことをくりかえしていいましたが、こんどは、お母さんはなにもいいませんでした。しばらくして、やっと口をひらきました。

「そんなこと、きゆうにいわれたってこまりますわ。どうして、きめるまえに話してくださらなかったんです。」

お母さんの声はふるえています。

「話すつもりではいたんだが、話せば、また決心がにぶると思ってね。」

「そんなだいじなこと、ひとりできめてしまつて——。」

お母さんの声がとぎれました。とも子もおなじ気持ちです。

「たしかにひとりできめてゐるかつたよ。でもな、山にかえることは、けつこんまえからのやくそくのはずだ。わすれたわけではないだろう。」

（えっ！ ふたりだけでそんなやくそくするなんて、ずるいな。）

「そりゃ、やくそくはしましたよ。でも、あなたが会社を定年でたいしょくしたあとだとばかり思つてましたわよ。なにも、係長になつたばかりで、そんなにあわててやめることないじゃありませんか。」

「あわてているわけじゃないよ。おれとしては、ぎりぎりまでまつたつもりだ。もうこれいじょう、ここにいたつてしかたのないことだ。」

「どうしてしかたがないんです。あなたはそれでいいかもしれないけど、ともちゃんはどうなるのよ。あんな山のなかの分校にいったら、大学にだつてはいれないじゃありませんか。」

「おれだって、あの分校で勉強して、ちゃんと大学まではいったじゃないか。」

「あなたの時代といまとでは、じょうけんがちがいます。」

「わかった。もういい。きみにはたのまん。ひとりでも山へかえるさ。」

「そんなかってな——。あなたという人は、いつもそうなんだから。それでも父親で  
すか。」

お母さんの声は、すっかりなみだぐんでいます。

「いったい、きみは、とも子とおれとで、どっちがだいじなんだ。」

お父さんの声も、ぶるぶるふるえています。

「あなたもだいじだけど、ともちゃんのほうがもっとだいじです。」

「そんなら、とも子にきいてみたらいいじゃないか。とも子が山へいくといったら、  
どうするんだ。」

「そのときは、わたしも山へいきます。ともちゃんがいかないといったら、わたしも  
ここへこのります。」

「まったくおまえは親おやばかだよ。」



Masa

「親<sup>おや</sup>ばかりでけっこうです。」

それつきり、ふつんと糸がきれたようにふたりの話がとぎれました。とも子はかたでそつと息<sup>いき</sup>をつきました。

（さあ、どうしよう。）

大学へいって勉強しようなんて考えたこともありませんが、山の分校<sup>ぶんこう</sup>へいったら、勉強がおくれるのはまちがいありません。

でも、とも子が山の分校にいかないといったら、お父さんとお母さんは、はなればなれにくらすことになります。山の分校にいくのは気がすまないけど、お父さんとお母さんがり、こんするよりはましです。

「お父さんがね、会社<sup>かいしゃ</sup>をやめて、くりこま山のおじいちゃんの家へかえりたいんだって。ともちゃん、どうする？　山へいってもいい？」

つぎの朝、お母さんからいわれたとき、とも子はちよつと考えるふりをしてから、「お父さんの生まれたところでしょ。だったらいいもいい。」

と、こたえました。

ゆうべから考えていたことばですが、のどから出るときは、だれかべつの人がいつているような気がしました。

「ほんとにいいの？　ともちゃんは、夏にしかいったことがないからわからないでしょうけど、雪だつて家がかくれるくらいふるんですよ。これからは、ピアノのおけいこにもいけないし、みゆきちゃんたちとも遊<sup>あそ</sup>べなくなるのよ。それでもいいの？」

お母さんの目は、いつもとちがつて赤くはれています。ゆうべはねむらなかつたのかもしれない。

お母さんの目を見ていると、なんだかつらくなります。とも子は、口もとをきゅつとしめるようにして、こつくりうなずきました。

「そう、ともちゃんは、山へいってもいいのね。」

お母さんの声に力はありませんでした。つぶやくようにいったあと、かたで小さく息をしました。

「よし、これできました。きょうこそ、会社<sup>かいしゃ</sup>にじひようをだしてくるぞ。」

それまでだまっていたお父さんは、はりきって立ちあがりました。

「えっ！　じひようは、きのうだしてきたんじゃなかったんですか。」

「いや、まだだったんだ。お母さんやとも子がどういうかわからなかったんでね。」

そういうと、お父さんは、はっはっはと声をたててわらいました。

「あなたという人は、ほんとに自分かってなんだから。」

お母さんはきつとにらみましたが、そのあとはなにもいいませんでした。わらい声にあきれたように、すぐうつむいてしまいました。

「お父さんは、どうして会社かいしゃをやめるの？」

お父さんが会社に出かけたあと、とも子はお母さんにたずねました。

「ここにいると、息いきがつまりそうだというのよ。」

「ふうん。だから、あんなにたばこばかりすってるの？」

「そうかもしれないわね。」

お母さんの目がちよっぴりわらいかけました。

お父さんが家にいるときは、いつもごろんとよこになって、たばこばかりぷかぷかふかしています。

「でも、山へかえったら、もうすこしたばこをへらしてもらわなくっちゃ。これから<sup>は</sup>畑仕事<sup>はたしごと</sup>が、お父さんの仕事になるんですからね。」

「お父さん、畑仕事ができるの？ あんなやせっぽっちで。」

うでだってほねがごつごつしていますし、ほっぺたのあたりも、しわがよるほどげっすりしています。

「お父さんだって、むかしはもうすこしふとっていたんですよ。ともちゃんが大きくなるにつれて、なんだか、ずんずんやせてきたみたいなの。町の空気がお父さんにはあわないのかもしれないわね。」

あとかたづけの手をとめて、お母さんはきゆうにぼんやりした目になりました。

「ふうん。町の空気がお父さんにあわないのか。」

学校でも家でも、とも子は息<sup>いき</sup>がくるしいと思ったことはいちどもありません。買<sup>か</sup>い物<sup>もの</sup>通り<sup>どおり</sup>をあるいているとき、お母さんの手をにぎりながらスキップしたくなります。

いくら首をかしげてみてもわかりません。でも、お父さんがこの町をいやだというのは、しかたがないのです。

すこしずつ引っこしのじゅんびがはじまりました。

お母さんとふたりで、さいごの買い物にきました。本屋さんの二階で、あたらしいノートをたくさん買ってもらいました。三年生のかん字ドリルや計算ドリルも買ってもらいました。

「ともちゃん、山の分校にいったら、しっかりがんばってね。わからないところは、お母さんがおしえますからね。みゆきちゃんたちに負けないようにがんばってよ。」

「うん。とも子、うんとがんばる。」

「それにね、ともちゃん。山には遊び場もないから、かえって勉強がいっぱいできるかもよ。」

ほんとに、みゆきちゃんたちより、ずっといっぱい勉強ができるかもしれません。通信ひょうだって、オール5になるかもしれない。

（学校からかえったら、すぐにつくえにむかおうと。）

ピアノのけいこにはいけなくなるけど、引っこし荷物の中には、あたらしい電子オルガンがあるのです。遊び友だちがいなくなつて、オルガンをひいて遊べばいいの

です。

そう思っているうちに、だんだんむねがはずんできました。山の分校がんこうにも、たのしいことがいっぱいあるような気がしました。

お母さんのうでにぶらさがりながら、はずむようにスキップしてあるきました。アーケードからのぞく空は、きれいに晴はれあがっていました。

## 2 雪のなかで

出しゅつ発ぱつの日がきました。

お父さんは引ひっこし荷物にもつといっしょに、もう山にいつています。とも子とお母さんがいくまでに、荷物の整理せいりをしているというのです。そのあいだ、とも子たちは、ちかくのお母さんの実家じっかへいつてとまりました。

いよいよ出しゅつ発ぱつです。駅えきまで、おばあちゃんがおくってくれました。

「ともちゃん、元気でね。夏休みになったら、遊あそびにおいでよ。」